りこうなエレーナ姫　　ロシア

昔むかし、ひとりの兵隊が、石の塔の見張り番に立っていました。その塔には固く錠が下ろされて、封印がしてありました。

夜中の十二時になったとき、塔の中からだれかが話しかける声が聞こえてきました。

「おい、兵隊さん」

兵隊は、

「だれだ、おれを呼ぶのは」とききました。すると、塔の中から返事が返って来ました。

「おれだよ、悪魔さ。三十年間、おれは飲まず食わずでここにとじこめられているのだ」

「悪魔だって。何の用だ」

「おれをここから出してくれ。そのかわり、おまえが困ったときには、いつでも力になってやる。おれのことを思い出しさえすれば、すぐに助けに行くよ」

兵隊は、封印をやぶって錠をこわし、とびらを開けてやりました。悪魔はさっと飛び出して、空高く舞い上がったかと思うと、いなづまよりはやく姿を消しました。

兵隊は、とんでもないことをしてしまったと思いました。

「たぶん、むちをたっぷり食らうだろうなあ。こうなったら、今のうちに逃げだしたほうがましだ」

兵隊は、足の向くままに歩き出しました。

一日歩き、二日歩き、三日目になりました。食べる物も飲む物もありません。お腹はぺこぺこでした。兵隊は道ばたに腰をおろして、泣きました。

（おれもばかなことをしたものだ。まるで飢え死にするために逃げだしたみたいなもんだ。悪魔のやつめ。みんなおまえのせいだ）

そのとたん、どこからともなく悪魔があらわれました。

「こんにちは、兵隊さん。何を泣いているんだね」

「泣かずにはいられないよ。もう三日も食べていないんだ」

「心配しなさんな。なんとかするから」

悪魔はそういうと、あちこちかけまわって、ありとあらゆるお酒やごちそうを集めてきて、兵隊の前に並べました。兵隊はお腹いっぱい食べました。悪魔は、いいました。

「おれのうちに来ないか。のんきに暮らせるよ。気のすむまで、飲んで、食べて、遊べるぞ。ただ、おれの娘どもを見張ってくれるだけでいい。ほかに仕事はないさ」

兵隊は、承知しました。

悪魔は、兵隊をかかえると、空高く舞い上がりました。山越え、谷越え、この世の果てまで飛んで行って、白い石造りの宮殿に着きました。

悪魔には、美しい娘が三人ありました。悪魔は、娘たちにむかって、兵隊のいうことを聞き、お腹いっぱいごちそうを食べさせるように命令しました。それから、悪事を働くためにどこかへ飛んで行ってしまいました。

兵隊は、この世のものとも思えないほど楽しく暮らしました。ただ、気がかりなのは、娘たちが毎晩、家をぬけ出して、どこかへ出かけることでした。何度たずねても、どこへ何をしに行くのか教えてくれません。そこで、ひと晩じゅう眠らないで、娘たちを見張ることにしました。

夜になると、兵隊はベッドに入って、ぐっすり眠ったふりをして待っていました。真夜中、兵隊は、娘たちの寝室のかぎ穴からこっそり中をのぞきました。すると、娘たちが、まほうのじゅうたんを運んできて床に広げました。娘たちは、じゅうたんに体を打ちつけてハトになり、そのまま窓から飛び出していきました。兵隊は、すぐさま、寝室にかけこんで、じゅうたんに体を打ちつけました。兵隊はコマドリのすがたになって、ハトを追って窓から飛び出しました。

やがて、三羽のハトは、緑の草原に下りました。コマドリは、しげみにかくれて見ていました。そこへ、数えきれないほどのハトが集まって来て、草原をすっかりおおいつくしてしまいました。そして、そのまん中に、金の玉座が置かれました。

しばらくすると、空高く、金の馬車がかけてきました。馬車を引くのは、六匹の火をはく蛇です。馬車の中には、絵にも描けず言葉でもいい表せないほど美しいお姫さまが乗っていました。お姫さまは、馬車から下りて、玉座に腰をおろすと、ハトを一羽ずつ呼び出して、さまざまな知恵をさずけました。ぜんぶのハトに知恵をさずけ終えると、お姫さまは金の馬車に飛び乗って、あっという間に飛んで行ってしまいました。ハトたちも、のこらず緑の草原から飛び立って帰って行きました。

コマドリは、三羽のハトのあとから飛んで帰りました。ハトたちは、寝室のじゅうたんに

体を打ちつけると、娘のすがたにもどりました。コマドリも、じゅうたんに体を打ちつけて兵隊のすがたになりました。娘たちは、おどろいて、

「まあ、あなたは、どこへ行っていたの」といいました。兵隊は、

「あなたたちといっしょに、緑の草原に行っていたんですよ。玉座に座る美しいお姫さまが、あなたがたに知恵をさずけるのを見ていました」と答えました。すると、娘たちはいいました。

「無事に帰れて運がよかったわ。あのお姫さまは、りこうなエレーナ姫です。エレーナ姫は、とってもこわいおかたよ。もしまほうの本が手もとにあったら、あなたはすぐに正体がばれて、殺されていたでしょう。もう草原なんかに行ってエレーナ姫に見とれないことね。さもないと、自分の首をなくしてしまうわよ」

つぎの日、兵隊は、またこっそりじゅうたんに体を打ちつけてコマドリになりました。そして、ハトの後を追って草原に行くと、しげみにかくれました。玉座に座っているエレーナ姫を見ながら、兵隊は、

（こんな美しいお姫さまを妻にできたら、どんなにすばらしいだろう）と思いました。

やがて、エレーナ姫は、金の玉座から下りて馬車に乗り、空高く舞い上がりました。コマドリは、その後を追って飛び立ちました。

馬車は、美しい宮殿に着きました。エレーナ姫は、侍女たちに出迎えられて、美しい寝室に入って行きました。コマドリは、宮殿の庭に舞いこんで、エレーナ姫の寝室の真下にある美しい木にとまりました。そして、ひと晩じゅう、すばらしい声で悲しげにさえずりました。エレーナ姫はその声に聞き入りました。

夜が明けると、エレーナ姫は、大声でさけびました。

「乳母や、侍女たちや。庭に出てあのコマドリをつかまえておくれ」

みんなは、庭へ飛び出して、コマドリをつかまえようとしました。ところが、コマドリは、しげみからしげみへと飛びうつって、どうしてもつかまえることができません。とうとう、エレーナ姫はがまんできなくなって、自分でつかまえようと、庭に飛び出しました。

エレーナ姫が手をさしのべると、コマドリは、待っていたかのようにおとなしくなりました。エレーナ姫はたいそう喜んで、コマドリをつかまえると、金のかごに入れて寝室にかけました。

夜になると、エレーナ姫は草原に出かけて行き、帰ってくるとベッドに入って眠りました。
コマドリは、ハエに変身してかごからぬけ出しました。そして、床に体を打ちつけて、兵隊のすがたになると、ベッドに近寄ってエレーナ姫にキスをしました。それから、すばやくハエになってかごに入り、コマドリになりました。
エレーナ姫は、ぱっと目をさましました。あたりを見まわしましたが、だれもいません。
「きっと夢でも見たんだわ」
エレーナ姫は、そう思って、また寝入ってしまいました。
ところが、兵隊は、またハエになってかごから飛び出すと、エレーナ姫にキスをしてかごにもどりました。エレーナ姫は目をさましましたが、やはりだれもいません。
三度目、兵隊がエレーナ姫にキスをしてかごにもどると、エレーナ姫はベッドに起きあがっていいました。
「これは、ただごとではないわ。まほうの本を調べてみましょう」
まほうの本を調べてみると、金のかごに入っているのは、ただのコマドリではなくて、若い兵隊であることが分かりました。
「まあ、無礼者め。すぐにかごから出ておいで。私をだました罰に、命をいただきますからね」
コマドリは、しかたなく、ハエになってかごから出てくると、床に体を打ちつけて兵隊の姿になりました。兵隊は、ひざまずいて許しをこいました。けれども、エレーナ姫は、
「だめです。おまえのような悪者を許すわけにはいきません」といいました。
兵隊は首切り台に乗せられました。エレーナ姫がハンカチをひとふりすれば、それを合図に首が切られるのです。兵隊は、
「お願いです。お姫さま。最後に歌を歌わせてください」とたのみました。
「はやく歌うがいい」
兵隊は、心の底から悲しい歌を歌いました。エレーナ姫は、思わず泣きだして、いいました。
「おまえに十時間の時間をあげることにするわ。もしその間にうまく身をかくしてわたしに見つけられなかったら、わたしは、おまえの妻になりましょう。でも、うまくかくれることができなかったら、首を切ります」

兵隊は、宮殿から出て、深い森の中に入って行きました。そして、しげみの下に腰をおろしてつぶやきました。

「ああ、悪魔のやつめ。おまえのせいで、おれは首を切られるんだ」

そのとたん、悪魔があらわれました。

「兵隊さん、何か御用かね」

「ああ、おれはもう助からない。どうしたら、エレーナ姫からかくれることができるだろう」

悪魔は、大地に体を打ちつけて、鷹に変身しました。そして、兵隊にいいました。

「兵隊さん、おれの背中に乗ってくれ。雲の上まで運んであげるから」

兵隊が、鷹の背中にまたがると、鷹は空高く舞い上がって、黒雲のかげにかくれました。

五時間たったとき、エレーナ姫は、まほうの本を手にとって、まるで自分のてのひらを見るかのように、何もかも見ぬいてしまいました。

「鷹や、もう飛ぶのはおよし。わたしの目はごまかせないよ」

鷹は地上に舞いおりました。兵隊はがっかりして、

「どうしよう。どこへかくれようか」といいました。

「待てよ、いいことがある」

悪魔はそういって、兵隊のほおを打ちました。たちまち兵隊は、留め針になりました。悪魔はねずみになって留め針をくわえ、宮殿にしのびこみました。そして、まほうの本を見つけると、本の表紙に留め針をつきさしました。

最後の五時間が過ぎようとしたとき、エレーナ姫は、まほうの本を手に取りました。ところが、本は何も教えてくれませんでした。エレーナ姫は、かんかんに怒って、本をだんろの火の中に投げこみました。そのひょうしに、留め針が本からぽろりと落ちました。留め針は、床にあたって、兵隊になりました。エレーナ姫は、兵隊の手をとっていいました。

「わたしもりこうだけれど、あなたはもっとりこうね」

ふたりは結婚式をあげ、それからは幸せに暮らしましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『ロシア民話集』中村喜和訳／岩波書店